



## 勝福寺観音堂附棟札一枚

観音堂は、桁行き四間、梁間三間の茅葺き・寄せ棟造りの建物である。内部中央には、本尊である観音菩薩をまつてある桁行き二間、梁間一間の内陣があり、正面は半部戸しとむ、後方には張り出しの仏壇が設けてある。内陣のまわり一間通りは、参拝者がすわって拝む場所である外陣がある。

観音堂の外側は、正面中央が半部戸構え、背面の中央間が板戸の片引きとなっており、その他は横板壁でおおわれている。

勝福寺の創立については明らかでないが、本尊脇侍の不動明王・毘沙門天像に弘安二年（一二七九）の銘があるので、少なくとも、鎌倉時代には宗教的営みが持たれていたことが想像される。

また、観音堂は、享禄二年（一五二九）に前身の観音堂が焼失し、その後永禄元年（一五五八）に葦名盛興によって再建されたと伝えられている。

勝福寺は、昔、京都から松島へ行く途中この地で亡くなった「勝の前」の冥福を祈って建てられたといわれるもので、かつては薬師堂をはじめ堂社も多かった。現在では観音堂のほか本堂、仁王門、鐘楼、ほうそう神をまつる小さな祠ほら、それに境外の宗像神社があるだけである。また、近くに勝の前の墓と伝えられる無銘の墓石がある。

なお、現在の観音堂は、昭和五十九年から六十一年にかけて解体修理がおこなわれ、往時の姿に復元されたものである。

観音堂は、三間堂としては規模が大きく、使用木材も太い。会津地方には、禅宗様の手法を交えた中世の三間堂が多く残されているが、この堂は、和様の要素が多く、縦長にした内陣など独特の平面を持ち中世末期の仏堂としてはすぐれたものと言われている。

所在地 関柴町三津井字堂ノ前 勝福寺

指定年月日 昭和五十七年六月十一日